実家に帰らせて頂きます！

珠洲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
実家に帰らせて頂きます！

【Ｎコード】
Ｎ２０８６Ｔ

【作者名】
珠洲

【あらすじ】
のんべんだらりと日々の暮らしを堪能していた山野翠（職業：女子高生）は、ある日銀色の光を目撃する。
高いスルースキルによって、一端はそれを無かったことにするものの、ふとした油断で翠はその銀色の光に捕われてしまった。
ついた先はやっぱり異世界。
優しいだけじゃない世界と喧嘩をしつつ、翠は自分の世界に帰る術を探していくことになる。

※多分コメディーです。恋愛が絡むかどうかは未定ですが、下ネタも若干入ります。
※先のことをまったく考えていないので、あらすじが大幅に変わるかも知れません。ご了承ください。

プロローグ

唐突であるが、私の話を聞いてもらいたい。
まずは自己紹介から。
私の名前は山野　　翠。やまのみどりなんて、ふざけたような角度によっては風流なような。いや、やっぱり安直じゃないか。もっとヒネリが欲しいところだ。
歳はもうすぐ１８歳。高校を卒業したらそのまま大学に進学予定。
背は普通。体重も……まぁ、普通。部活をやめてついた太ももと腹の肉が気になるくらい。
性格は知らない。やや渋好みとか言われるけど、私だけじゃなく他にもいるはず。
特技はこれといって無い。ちょっと本を読むのが速いのと小学校から続けているピアノくらいだ。しかもあまり上手くない。　そんなわけで趣味は読書とピアノ。あと映画鑑賞。だけど別に同じ監督の作品を見て違いを見つけたりだとか、マイナーな映画を集めたりなんてもんじゃない。流行りの映画を見たり、好きな俳優の出ている映画をちょこちょこ見たりするだけだ。
多分自己紹介の欄に『例文』として書いてもそんなに違和感は無いはず。そんな趣味。
友達から『変わってるね～』なんて評価をそこそこ受けるくらいの個性はあると思うが、似たような女子高生なんて探さなくてもいっぱい居そうなもんである。
流れに身をまかせて、のんべんだらりと暮らしてきた。それが私。
……のはずだったんだが、最近なにかおかしい。
いや、最近と言うと語弊がある。正確にいえば、ここ二年ほどおかしい。

最初に『それ』に気付いたのは、下校中に道を曲がった時だった。
ふと何か違和感を感じて足元をみると、水たまりがあった。ここ一週間は雨なんぞ降って無いのに水たまり。整備されたてのアスファルトの道ど真ん中にキラキラ輝く水たまり。
近所の人が水を撒いたのかもしれないが、どちらにしろ学校指定の革靴はあまり水を弾かない。わざわざ濡らすのもなぁ、と水たまりの傍を迂回して私は道を抜けた。
ふと呼ばれた気がして、水たまりのあったほうを振り返ると――――なんと無くなっていた。一瞬で。水たまりが。
しかしまぁ、これがでっかいビルとか家とかだったら騒ぐくらいのことはするが、所詮は水たまりである。
特に何も気にせず、私は無事に帰宅した。

次に『それ』に気づいたのは部室を出るのが遅くなって、一人になったときだ。
着替え終わって、さあ帰ろう！と部室のドアを開けようとドアノブに手をかけたら、また何かに呼ばれたような感覚。
しかし私は割と怖がりである。静まった校舎の中で一人、呼ばれた感覚があるからといって振り向くなんてそんなホラーフラグを建てるようなことは出来ない。
でもまぁ、確かにちょっとは気になる。間違いでも今は一人だし、恥をかくことも無い。
極力体を動かさず、視界の端で確認すると後ろのロッカーのドアが開いていた。開いていただけなら良かったのだが、中が何故か銀色の光を放っている。
誘うように揺らめいている光は綺麗なのだが、まさか行くわけが無い。今日の夕飯は唐揚げなのだ。
見つめつづけていると、頭がポウッとなりそうな光であるが尚更怖いので行きたくない。

私は部室の鍵をしめて、家に帰った。

あれ、これはおかしいなと思いはじめたのは三回目に『それ』を見た時だ。　風邪で休んでいる間に勝手に任命された図書委員の業務をこなしていると、奥に見たことのないような文字が書かれた本が置いてある。

まばらではあるが、人がいつも居る図書室は、不思議とその時だけ静まり返っていて私一人のようだった。

不思議に思って屈んで表紙を見てみると、今まで見たこともないような字だ。

しかも古ぼけていて、うちの学校のラベルも張っていない。

あとで先生に言っておけば良いだろうと、取りあえず腕の中にあった本の山を片付けるために体を翻した時だった。

ちょっと前にロッカーでも見た銀色の光に本が包まれたのだ。

神々しく輝く本を見て、私はしばらくポカンとしたあとに思いっきり訝しげな顔をした。多分一生のうちにそうそうしない表情だったと思う。

だってとてつもなく怪しいことこの上ない。ドッキリにしては地味だ。怪奇現象にしては特に被害はなし、不思議と怖いものは感じない。なら一体何なのか。

前々回から呼ばれている感覚はヒシヒシとするが、本当に召喚とかいうファンタジーなやつなのだろうか。

別にファンタジーが嫌いなわけじゃないが、お話の中だから好きなのであって、現実にされてしまうと少しどころでは無く困ってしまう。

この光が何処に繋がっているのか、そもそもこの推測が当たっているのかなんてわからないが、米も味噌も醤油も無い世界は生きに

くい。
別にいま生きている環境に不満があるわけでもないし、現代のテクノロジーが提供する娯楽から離れて暮らせるほど達観もしていない。
眉間にシワを寄せたまま、しばらく考えると私は取りあえず二回手を叩いて光を拝んだ。

「大変申し訳ありません。そちらにはお伺い出来ません。恐れ入りますが、そのままお引き取りください」

深々とお辞儀をしたあと、先程ポカンとしたついでに落としてしまった本を拾って、私は銀色の光に背を向けた。

まぁ、だがしかしこれで終わるわけがない。
その後も、私が一人になったときを見計らって『それ』は現れた。
一向に引っ掛からない私に焦れたのか、ここ最近はあからさますぎて逆に私がひやひやしてしまう。
鏡を光らせたり引き出しの中を光らせたり、ついには洗濯機の中を光らせたり。
それだけ続くと私も絶対に引っ掛かるものかと意地になってしまうってもんである。
出現したら極力触れないこと。見なかったことにすること。それからなるべく一人にならないように気をつけること。
友人や家族に相談しようかと思ったが、病院に連れていかれそうなので諦めた。
ただ、もし万が一銀色に持って行かれた場合を考えて、机の中に

手紙を書いて置いた。
いや、連れていかれる気は更々無いけどね！

そんなわけで、ここ最近の私の話は以上とする。
ここからは現在進行形の話であるが、何を隠そう、私は今、銀色の光を通って異世界だかなんだか知らない所に連れていかれている真っ最中なのだ。
十行も進まないうちに前言撤回？と罵られそうだが、これは私の意思では無いことをわかって頂きたい。

簡単に説明すると、

『部屋で漫画を読んでいたら急に銀色の光を放つ鏡みたいなのが現れたけど、いつもの事と放っておいたら中からズルズルした服を着た男が現れて机の上にあった物を持って行こうとした。んで、その物というのが畳んで後で仕舞おうと思っていた下着だったので思わず止めようとしたら目測を誤って銀色の光に触れてしまった。慌てて手を引いたら、間髪いれずその下着泥棒が私の手を掴んで鏡に押し込んだ。ちなみに悲鳴をあげようとしたら口を手で塞がれました。つまり誘拐です』

ということになる。
全然簡単簡潔じゃないが、間に

「ちょ、変態」

とか

「え、あ、何これ変態が」

とか私の戸惑った心情を挟まなかっただけ許して欲しい。

取りあえず今、私は二年近く戦い続けた戦に負けて、銀色の光を通っているわけだ。

非常に無念である。

と、私は光に包まれたまま思った。

元凶の下着泥棒は、なんか知らないが鏡に入った途端どこかに消えてしまった。

一人でぽーんと放り出されてしまったわけだが、銀色に包まれたこの空間は気持ちが良い。

そう、覚えていないが母の胎内とはこんな感じではないだろうか。

ぼんやりしながらつらつら考えていたが、本格的に瞼が重くなってきた。

本当に胎児のように体を丸めて、心地好いまどろみに身を任せようとした所で思い出した。

———そういえば、下着返して貰ってない。

どうしよう、とゴロンゴロンしてみたが襲い来る睡魔には勝てない。

そのまま私は意識を手放した。

第一話

寝ている時って意外と外の音が聞こえているもんである。
私だけかも知れないが、眠りが浅いときや起きかけの時は外の音声を拾い、なおかつしばし考える余裕すらある。
お母さんに『起きなさい！遅刻するよ！七時だよ！』と急かされた時なんて、身支度にかかる時間と朝ごはんを食べる時間、それから学校までかかる時間を頭で計算して『あと5分ほど余裕がある』なんて答えを出すほどには頭は回転する。
大抵は間に合わないんだが。二度寝して寝過ごすから。

今、私はそんな状態である。体は眠りに落ちているが、頭はぼんやりとしつつも、周りの音声を拾っている。
そういえば、銀色の光にとうとう触って、不思議空間に引き込まれたんだっけか。あぁ、悔しい。負けた気分。
ということは、ここはどこだ。なんだか騒がしいが一体どこなんだ。あの安らぐ銀色の世界はどこにいったんだ。
現実逃避はしちゃならんと思うが、眼を開けたくない。
断片的に聞こえる言葉は理解できるが、理解したくない内容なのでなおさら眼を開けたくない。

———ああ、いやだいやだ。

このままもう一度寝ようかなんて、土台無理な話だった。

もはや断片的では無く、はっきり聞き取れる周囲の声に反応して思わず顔と手の筋肉が動いてしまったのだ。
私の目覚めを察知してか、声がひそめられる。　おいおい、皆に見られてたのかよ。私の寝顔。
ここで起きないのも何だか申し訳ないというか勿体振りやがって！と思われそうだ。
ああ、私のだらし無い筋肉が憎い。
仕方なくさも『いま起きまして、何事か把握していません』という体を装いながらゆっくりと眼を開けた。

———いや、やっぱり寝よう。

現実逃避がなんだ。逃避して何が悪い。
知らない、私は何も見てない。

「お目覚めになられたぞ！」

そう大声で言ってくれるな、そこの若いキラキラしたお兄さん……。
注目が集まって、本当泣きそうですわ……。

「どうぞ、お手を」

あーこりゃダメだ、ともう一度眼を閉じようとした所に、手が差

し延べられた。
大きな広い手の持ち主の方を見てみると、見てみると、見てみ……ああああー美形だなーー！ああー眼が潰れそうだぜこんちくしょう！
サラッサラの金髪と、澄んだ青い瞳に甘い顔立ちなんて王子様じゃないか。
周りを見渡してみてもタイプは違えど、美形ばかり。
西洋的な顔立ちの評価はよくわからないけど、日本だったら物凄くモテると思う。

「あ、いえ、結構です」

「さようでございますか」

なんだか恐れ多くて手を取るのを断ると、お兄さんは優雅に微笑んだ。
私が寝ていたのは、どうやら祭壇のようだった。手触りの良い、上質な布がかけてあるとはいえ硬い上に寝づらい。首が痛い。
軋む体を起こして、辺りを見渡すとやはりどうも神殿らしい。神社か寺にしか行ったことが無いが、独特の雰囲気は似通っていると思う。

「あの、ここは一体……？」

演技でもなく、震える声を抑えて尋ねると先程の王子様系美青年は柔らかく微笑んだ。

舞でも踊るかのように手を挙げると周囲にいた人々がいっせいに額ずいた。

あ、やべ、なんか地雷踏んだぁあああ聞きたくないぃいい！！

「我ら“星の詠み人”は、貴女を心より歓迎致します。星の流れと輝きが常に御身を祝福せんことを」

歌うように言葉を綴った王子様は、これまた丁寧に床に膝をつき私にひた、と眼を合わせた。

綺麗で曇りの無い眼だ。ピカピカの宝石みたい。

「我らは貴女をずっとお待ちしておりました。世界の寵児たる貴女に我が身と心を捧げる許しをどうぞ、私めに」

ピカピカの眼に気を取られた瞬間なんか凄いことを言われた気がする。

言い切った後のお兄さんはもっの凄い笑顔で私を見た。

ピカーとかペカーとか効果音がつきそうだ。ついでに後光とかも。

そして何より困ったのが、笑顔の裏に『まさか嫌がったり断ったりしませんよね？』という思惑が透けて見えることだ。

空気が読めてしまったことを悔いる日が来ようとは。

いや、でもしかしここで流されて頷いたら何かもうフラグが建ちまくらないか！？

それはすなわち帰れないフラグではないか！？

数瞬の間でこれだけ考えた私は、実に日本人らしく曖昧な笑みを浮かべた。

「ぜ、善処します……」

「……」

ヘラッと笑った私の笑顔とピカピカの一等星なお兄さんの笑顔は、嫌な沈黙を挟んで……それから私がそっと眼を逸らした。

何この世界。もう耐え切れない。

第二話

そっと眼をそらした所で、元の世界に戻れるわけもなく。

キラキラ王子様の指示により取りあえず場所を移して話を聞くことになった。

うやうやしく導かれて、扉を開けた先には髪をきちんと結い上げ白いレースを垂らした女の人たちが。

二次元や二・五次元でよく見るような服ではなく、綺麗なグラデーションの布をたっぷり使った服を身に纏っている。

アラビアンナイトのような格好に近いのかもしれないが、露出はほとんどない。

ただ、纏わり付くように薄い生地を重ねているので時たま見える腕の陰影やら脚のラインやらがチラチラ見えて、これはこれで良いものです。ありがとうございます。

「彼女たちは、貴女をお世話する者です。どうぞ何なりとお申しつけください」

キラキラ王子様がそう紹介すると、一際長いレースを頭につけた女の人が進み出た。

歳は多分四十半ばだろうか。いや、西洋系の外見上から年齢を察するのは難しいが、落ち着いた物腰からそう判断をつけた。

「彼女はここの女官長、マリーシアです。今後は彼女との接触も多いかと思います。どうぞ、お見知りおきを」

「は、はあ……」

お見知りおきを、なんて言われて即座に了解！とか言える教育は受けてない。

出来たのはなんとなく頷くことだけだった。

というかこのキラキラ王子様偉そうだな。いや、本当に偉いんだろう。

説明する姿が堂々としているし、誰もが粛々としてそれに従っている。さもそれが当然であるかのように。

「では、寵児さまこちらへ」

半ば感心しながら後を着いていくと、瀟洒な細工が刻まれた扉が開けられた。

さっきから思っていたが、ここの雰囲気は西洋風王道ファンタジーというより、やや中東っぽい。

ロココっぽい感じもするが、タイル装飾もあるし色々混じっているんだろう。綺麗だから見応えあるけど。

「さ、こちらへ」

これまた綺麗な細工の椅子を進められ、恐々と座った。

周りを見渡してみたら、椅子は一つしかない。あれ、説明を受けるって聞いたんだけど、他の人はどうすんだろ。

そんなこと思っててても初対面ばかりの人達には聞けないチキンハート。
取りあえずお茶とか出されたり、人が入ったり出たりするのをぼんやり見ているだけである。

出されたお茶を半分くらい飲んだところで、扉がゆっくり開いた。
入ってきたのは、白いおヒゲが長い、わし長老☆なんていいそうなお爺さんだった。いや、☆は付けんと思うが。
多分高齢であろうお爺さんは背筋がしゃんと伸びていて、意外と背が高い。
伸びた眉に隠れて見にくいが瞳がとても優しそうで安心できる。
にっこり笑うと、お爺さんは優雅にお辞儀をして床にひざまづいた。

「生きている内に寵児さまにお目にかかることができるとは、なんたる僥倖。我等“星の詠み人”は、貴女様を歓迎いたします」

「いえ、あの、そんな」

慌てて椅子から立ち上がった。
年長者が床にひざまずいているのに、椅子に座っていられるほど厚顔ではない。
お爺さんの所に屈み込み、そっと手を取る。

「あ、あの取りあえず立ってください。いけません、そんな、あの、床なんて」

しどろもどろだが、言いたいことは伝わっただろうか。
お爺さんは眼をパチクリ（可愛い！）させると、ほっほっと笑った。

「ではお言葉に甘えますな。有り難や」

「椅子を一つ頼む」

お爺さんがゆっくり立ち上がると、傍にいたキラキラ王子様が扉付近の侍女さんに椅子を頼んだ。

「あの、出来たら、説明していただける方人数分椅子を用意して頂いても」

恐る恐るキラキラ王子様に頼むと、少し驚いたように王子様は私を見た。
や、手間かけてすみません。でもひざまずかれるの慣れてないんですみません庶民ですみません。

「寵児さまがこう仰せであるし、お言葉に甘えてはいかがかのう」

「……では、そのように」

キラキラ王子様が手を振ると男の人たちが椅子を二つ運び込んだ。
ということは、説明係はお爺さんとキラキラ王子様の二人ってことか。
ついでに人数分のお茶とお菓子が運び込まれ、それぞれに行き渡った所で私は背筋を伸ばして王子様とお爺さんを交互に見た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2086t/

実家に帰らせて頂きます！

2011年6月11日14時02分発行